研究ノート

「絵葉書の備考－史（資）料としてのアプローチ」

武　田　信　也

要旨

歴史を読み解く史（資）料として絵葉書が注目されているが、多くを地域史（資）料として受け入れている保存機関では、展示などでの活用のためにはデータ化が必要になる。一般に作成背景など単独では来歴のよく分からないことが、絵葉書の敬遠される理由でもある。

本稿は、鹿児島の「名所」や「博物館」関係の絵葉書を題材に、作成背景や作成主体の意識を探ろうとするものである。周辺他史料との対照により、地元の名所史蹟についての考え方や、島津公爵家によって設立された尚古集成館が、旧藩諸領域まで含む展示意識を持っていたことを明らかにした。

1．絵葉書の作成背景を調べる

佐藤健二氏は、平成６（1994）年に刊行された『風景の生産・風景の解放』の中で「絵はがきのような一枚刷の資料は、書誌学も古文書学もほとんど周辺に追いやってきた」[(1)] と指摘し、絵葉書のデータ化はまずは社会学の課題としている。これは、絵葉書を郵便文化・印刷技術・写真文化の交わるところに生まれたものと位置付ける視点である。刊行から20年が経過するが、データ化の必要に直面しているのは、社会学分野だけではなくなってきている。絵葉書の類を守備範囲外とし、周辺に追いやっていたはずの地域の博物館や図書館、公文書館の現場も、データ化の必要に直面していると言える。筆者自身、15年前から市史編さんやアーカイブの現場に身を置いているが、前記の機関における日常的な職務として、予算で絵葉書を購入したり、寄贈で受け入れたこともある。これらの絵葉書は、地域にかかわる画像史（資）料の扱いであった。

生田誠氏の『麗しき日本絵葉書　100の世界』では[(2)]、1300枚の絵葉書を100分類に分けて紹介しているが、最近では交通や別府など特定の分類で集めただけでも、一冊の本が出来るようになった[(3)]。

また、時代史や通史を描く史（資）料として利用され[(4)]、博物館での展示において、主展示物となることもある[(5)]。現在絵葉書を所蔵している館があっても、図書館における書誌情報、博物館における所蔵品情報が不明や空欄では、キャプションも書けないことになり、展示や情報提供にも積極的には利用できないだろう。不明や空欄となるのは、絵葉書自体に情報が少ないからであり、単独で整理を行おうとすると、作成背景などが分かりにくく、敬遠される理由になる。その点佐藤氏が「絵はがきをデータとして記録し表示する方法がいまだ確立されていない」[(6)] と指摘した点は、現在も課題として残されている。所蔵品と来館者の間に介在する担当者にとっては、内容と背

景を追跡可能な絵葉書を所蔵していれば、備考欄をいかに埋めて置くかが課題である。

逓信省、旧外地発行のものなど、日本の政府機関や公的団体の発行になる絵葉書については、郵趣分野から分類と研究が進められてきたが、島田健造氏は昭和60（1985）年発行『カラー復刻版日本記念絵葉書総図鑑』原著の編集について「ただ図版を見るだけでは何を意味するのかわからぬものもあるので、記念絵葉書発行の背景となった事項の解説をつけることによって、その理解の度合いが一層深まると思うのである」と述べる[7]。島田氏の著書は、図鑑でありながら、発行背景の解説にページの多くを割いている。

背景を調べ込んで、葉書１枚に付約1000字の解説を付ける橋爪紳也氏の手法も参考になる[8]。絵葉書本体の伝来や発行についての背景研究が深まれば、歴史史（資）料としてより活用できるのではないだろうか。

２．同時代人の見る絵葉書の機能

元号が明治から大正に変わったころの新聞に、「繪葉書の今昔」という記事がある[9]（大正元年12月12日付『鹿兒島新聞』）。東京逓信管理局長棟居喜久馬の談話で、日本における絵葉書の発行が、明治33（1900）年の郵便法実施の時に始まり、明治38（1905）年には流行の最高潮を迎え、明治44（1911）年には最高潮の38年の取り扱い枚数を超えたことを語る。また、近年の絵葉書の流行については、「風景画」と「時事問題」の流行を挙げている。

> 近来は　▲時事問題の際物　がまた流行して來る。御大葬儀、乃木將軍の自刃、大演習、進水式、文部省繪畫展覽會、芝居相撲等の光景が早くも翌日には繪葉書になつて現はれる事になつて來た田舎へ之を送つて遣れば其時々の出來事を歴々と知り得る事になるから是は結構な事であるが一層之を盛大にするには機敏と同時に更に精巧な物を出して欲しい近來風景畫が盛んになつたのも其理由の一つで旅人抔が旅行の足跡を知らす爲めに土地の名所古跡の繪葉書を送るからである實際旅行として其の月日のスタンプを押した土地土地の繪葉書のをアルバムに挿んで置けば夫れだけで立派な旅日記が出來る、

明治38年は日露戦争の頃にあたる。逓信省で絵葉書図案主任を務めた樋畑雪湖よると、逓信省第５回目の戦役記念絵葉書が出た明治40年前後が、ブームの最高潮であったという[10]。この新聞談話の棟居喜久馬は、初代郵便博物館館長を務めた人物でもある[11]。逓信管理局という郵便を取り扱う側の証言であるが、この当時絵葉書が、社会の出来事を伝える時事メディアの役割を持ち、その一方で、旅行先で差し出す人向けの地方発信メディアとして、「風景画」と呼ばれる名所旧跡の絵葉書が盛んに作られるようになったことが分かる。絵葉書が時事メディアとしても成立できたことについて細馬宏通氏は、新聞よりも解像度の高い写真印刷が使われていたことがその理由とする[12]。明治から大正を生きる同時代人は、絵葉書の「速報性」と「地域性」の側面に目を向けている。

３．パックされた名勝・旧蹟

「鹿兒嶋名勝[13]」という絵葉書セットがある。冊子状で、1セット丸々切り離しなしで残り、当時の発行者の意図が分かるものである（図1、表1）。

鹿児島市域にある名勝や史蹟を写しているが、裏面を見ると、全体の3分の1が通信欄となっており、通信欄として宛名面の半分が利用者に解禁された大正7（1918）年以前の作成と考えられる。裏表紙に「鹿兒島市文華堂發行」とあり、市内の文華堂発行ということが分かる。『かごしま印刷史』では、明治後期から鹿児島市内における主な絵葉書発行元と

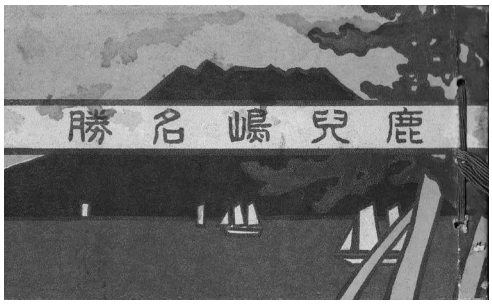

図１　「鹿兒嶋名勝」表紙

図２　「城山公園より見たる市街及桜島」

して、「俣野集景堂」と並んで、市内天神馬場の「文華堂」が挙げられている[14]。この文華堂は、方言で生活風俗を紹介する「鹿兒島言葉[15]」など、その他の種類の絵葉書も発行している。

タイトル	絵葉書個別タイトル	題材
麑島名勝	城山公園より見たる市街及桜島	市街と桜島
麑島名勝	市街より見たる城山	市街と城山
麑島名勝	鶴丸城跡（現今第七高等学校造士舘）	鶴丸城石垣と堀
麑島名勝	別格官幣社照國神社	照國神社鳥居前
麑島名勝	麑島海岸	岸壁の賑いと桜島大根
麑島名勝	天保山（甲突河畔）	天保山と松並木
麑島名勝	磯島津公爵邸	旧藩主島津家別邸
麑島史蹟	南州翁洞中紀念碑及洞窟	西郷隆盛籠城洞窟
麑島名勝	磯の風光	旧藩主別邸前の海
麑島史蹟	西郷南州翁終焉之地	終焉の地石碑
麑島史蹟	西郷南州翁以下諸士の墓	南州墓地（薩軍墓地）
麑島名勝	錦江湾の帰帆	錦江湾の軍艦と帆船

表１　「鹿兒嶋名勝」内容一覧

現在ほとんど見られないが、当時の絵はがきのスタイルとして、余白下部にタイトルや個別タイトル、英文がレイアウトされる（図２）。同一タイトルのくくりでも「史蹟」と「名勝」の違いがある。これが判明するのも、ミシン目がつながっているからである。ミシン目なしの袋入りならば、郵便に使用したものは残らず、また後世の人間が見出しの違いで別グループに分ける可能性もある。

全12枚のセットは、西郷隆盛関係（３枚）・桜島（２枚）・旧藩関係（４枚）・市街（３枚）の構成となっており、西郷隆盛関係の絵葉書が多く、西南戦争の戦跡などが「史蹟」として紹介されて

いる。

明治43（1910）年作成の『鉄道院線沿道遊覧地案内[16]』には【　】付きで遊覧地が紹介されるが、鹿児島関係では「錦江湾」「鶴丸城」「城山」「浄光明寺岡」（南州墓地）「照國神社」「磯の浜」「仙巌園」が、絵はがきセットと選ばれたスポットが同じである。この明治43年には、地元でもガイドブック『鹿児島市案内記[17]』が作られるが、「遊覧地」の項目には同様のスポットが並ぶ。絵葉書の内「照國神社」を『鹿児島市案内記』では「島津家第廿八代の英主齋彬公の靈祠にして」と紹介し[18]、「天保山」は「天保の末年甲突川浚渫の際その川砂を以て埋立てられたる地にして、島津齋彬公外國式の練兵を採用せらるゝや此處を以て練兵場となし、海岸近く砲臺を築きて防備に供したりしが」とその歴史を語り[19]、「磯島津公爵邸」は「我が東宮殿下をはじめ奉り英國皇甥コンノード殿下、曾てこの邸を以てその旅館に宛て給ひたる等来麑の貴紳にして足をこの邸に入れざる人なく、奈何に其の山紫水明の絶勝なるかを知るべし」と皇室やイギリス王室とのゆかりを紹介している[20]（図３）。

図３　磯島津公爵邸

前年の明治42（1909）年に鹿児島市まで鉄道が全通しているが、『かごしま印刷史』が指摘するように、鉄道網の発達は、観光に伴い地図や絵葉書などの需要を生み出す契機にもなる[21]。確かに『鹿児島市案内記』の広告を見ても、地元書店発行書目の中に「最新鹿児島市街實地踏査圖」や「肥薩鐵道旅行案内」に交じって「鹿児島名所繪葉書」が見えたりする[22]。商売として売り捌くことを考えると、絵葉書の題材を決める際に、『鉄道院線沿道遊覧地案内』や『鹿児島市案内記』のようなガイドブックを参考にするのは、想像に難くない。

鹿児島市内で「名勝・史蹟」を廻るなら、ここを見てほしいという意識、あるいは見るべきという主張が絵葉書の中には反映されている。我々も、当時の人々の「見せたい風景」を「見せたいカット」で見ているに過ぎない。

大正５（1916）年４月、当時立憲政友会総裁の原敬は、政友会の九州大会に合わせて九州各県を巡回しているが、『原敬日記』から鹿児島市訪問の際の様子を見てみることにしよう[23]（「筑紫紀行」）。

> **十三日**　早朝、雨を衝て照國神社に參拝し、歸路、物産陳列所、西郷隆盛終焉の地、及び四十餘日間も籠居せしといふ岩窟などを一覽し、西郷及び郎黨の墓に詣づ。〔中略〕櫻島は、先年爆發の際に於ける熔岩、海中數町に流出し、今猶ほ盛んに水蒸汽の昇るを見る。〔中略〕午後、島津家の別邸なる磯御殿といふを訪ねて休憩せしが、前は薩摩灣にて、後ろは山に據り、如何にも幽邃閑雅の地なり。〔中略〕歸途、慶田陶器場、西郷・大久保誕生地などを一覽し、社（少年集會所）に立寄り、鹿児島新聞社を訪ねなどして城山公園に上る。眺望甚よろし。

原は一日で「照國神社」「西郷隆盛終焉の地」「岩窟」「西郷及び郎黨の墓」「櫻島」「磯御殿」「城山公園」と、絵葉書で紹介された名勝・史蹟のうち７か所（「薩摩灣」＝錦江湾を含めて８か所）を遊覧していた。『鹿兒島市案内記』で「来麑の貴紳にして足をこの邸に入れざる人なく」と紹介された「磯御殿」も廻っている。『原敬日記』本文の方を見ると、「本日晴雨不定なりしに因り、櫻島附近の舟遊など企たる由なるも見合せたるが」とあって[24]、天候により中止となったものの、原のために船による錦江湾遊覧も組まれていた。遊覧が行われていれば、原は鹿児島港と海沿いの天保山も目にしたはずである。鹿児島市内でここを見てほしいという意識は、遊覧のお膳立てに反映されている。

文華堂発行の絵葉書に「鹿兒島言葉」というものがあることは先に述べたが、次に挙げるのはそのセット中に入っている「旅館」というタイトルにある会話である（図４）。イラストの上に鹿児島方言の台詞が書かれている。

客　　カゴシマァ、ヨカ、トコイ ヂャネー、
客　　ドコンヘンヌ、ケンブツスレバ、エドカイネ、
女中　シロンヤマ、ジョコメシ、ソイカァ サクラジマン フンクゥン アトナンドガ、ヨシュゴゥンソ、

旅館にやってきた客と女中の鹿児島弁での会話であるが、以下は併記された訳文である。

客　　鹿児島はよいところだねー、
客　　どこらを見物すれば良いかね、
女中　城山、浄光明寺、それから櫻島の噴火のあとなどが、宜敷う御座りましょー、

図４　「旅館」

大正３（1914）年に、桜島が大規模な噴火をしており、同じセットには「櫻島噴火」というタイトルもあるので、この絵葉書は大噴火以降の発行と分かる。客に鹿児島の見物先を問われた旅館の女中は、とっさに城山、浄光明寺（南州墓地）、桜島を見物すればよいと勧めている。

鹿児島市での観光の要素として３Ｓ（Saigo、Sakurajima、Shimadzu）と言われたりするのであるが、現在まで続く観光コースの定番は、「遊覧案内」と「絵葉書」を見ることから、大正の頃までには形成されていたことが分かる。

名勝としての桜島は今も変わらない。しかしここで地元の人々に史蹟として意識され、語られている場所は、鹿児島市域、中でも鹿

児島城下を中心にした史蹟であった。

４．絵葉書に見る展示意識

先の「鹿兒島名勝」において、磯の島津公爵邸は名勝として紹介されているが、隣にある集成館は別なカットで風景として映り込んではいるものの、絵葉書の題材にならなかった。『鹿兒島市案内記』は「嘉永六年の夏、齋彬公軍器其他百般の工業を興し、殊に製鉄事業の發達を期せんがため創設せられたる所にして」と前置きして、

〔前略〕文久三年英艦来寇の時、破焼されたるため更に集成館を再設し、或は紡績所を設け水力を利用して日本紡績業の始めを開かれたれど、紡績所は近年取り除かれ、集成館は今猶ほ盛に鉄工を主として諸種の事業をなせり。

と最近の操業の様子を紹介している[25]。集成館は薩英戦争後再建され、プロイセン使節団が訪問した明治３（1870）年頃には紡績工場、大砲鋳造所、磁器工場、ガラス工場が稼働していた[26]。明治以後も一部は操業を継続した工場群であり、同時代の人々に史蹟という意識は希薄だったと考えられる。磯公爵邸については、園中央の望嶽楼に、ポルトガルから大友義鎮に贈られた砲２門と、朝鮮の役の際持ち帰った木馬が置いてあると紹介されるが[27]、展示と呼べるものではない。原敬は大正５年九州巡回の際、宮崎神宮の徴古館、熊本の本妙寺宝物館を見学し、常設ではないが長崎県庁では維新前の古文書類を一覧している[28]。磯公爵邸で史（資）料を一覧した形跡はなく、この頃の鹿児島には史（資）料を常設展示する施設が無かったといえる。

田村省三氏によると、大正４（1915）年に集成館事業が廃止され、その後島津家臨時調査所内で博物館構想が取り上げられた。その後旧集成館機械工場を改築する形で、大正12（1923）年に尚古集成館となった[29]。

大正12年５月「惟フニ我ガ高祖忠久公薩隅日三州ノ守護職ト為リテヨリ累世相承ケテ旧封ヲ保有スルコト七百余年文ヲ敷キ武ヲ修メ士ヲ養ヒ民ヲ撫テテ西陲ノ重鎮タリ」から始まる設立趣旨[30]の中で、次のように館のコンセプトが語られる。

維新ノ際西郷大久保ノ諸公ヲ始メ人材輩出シテ克ク忠克ク勇君国ニ報効セシ旧藩ノ偉績ハ実ニ三州ノ光華ニシテ七百年来涵養スル所ノ結実ナリ其ノ淵源素ヨリ遠ク其ノ後人ニ及ボス効力ヤ亦大ナリ今ニ及ヒテ関係資料ヲ蒐集セスムハ恐クハ散佚ノ憾アラムト因テ臨時編輯所ヲ拡張シテ史料ヲ蒐集セシムルト共ニ殘存スル所ノ旧集成館ヲ修築シテ尚古集成館ト名ケ三公偉績ニ関スルモノ及ヒ更ニ淵源ニ遡リテ宜ク考査ニ資スヘキモノ又ハ名公賢佐ノ事蹟ト歴代ノ美風トヲ顕彰スヘキ史的資料ヲ此ニ陳列シ以テ公衆ノ観覧ニ供セムトス

「設立趣意書」文中の三州とは旧鹿児島藩領であった「薩摩国・大隅国・日向国」のことで、三公とは「島津斉彬、島津久光、島津忠義」を言う。西郷、大久保などの人材を輩出して成った明治維新を「七百年来涵養スル所ノ結実」と位置付け、関係する史（資）料の散逸を防ぐため収集に努め、展示場所として旧集成館を修築したことを挙げている。収集展示の範囲は三公のみならず、その前時代のもの、またその他の人物の史（資）料にも及ぶことが分かる。

公爵忠重自身、戦後『随筆　はばたき』の中で「この館は島津家や旧薩藩の歴史を知るに便利なように設けたもの」と述べていて[31]、歴史的史（資）料の多くが個人所蔵で、博物館も少ない時代にあって、誰でも見学できる施設であった。

この尚古集成館では、展示品を撮影した絵葉書を発行している。「陳列品繪葉書[32]」は現在５枚組になっているが、「鹿児島名勝」とは異なりミシン目でつながっておらず、袋には何枚組か記載もないので、元々何枚だったかは不明である（表２）。

タイトル	絵葉書個別タイトル	題材
尚古集成館陳列	島津義弘公乗馬模型	馬具
尚古集成館陳列	駕籠　挟箱　茶辨當	藩主の駕籠　挟箱　茶弁当
尚古集成館陳列	矢倉時計	機械時計
尚古集成館陳列	錦ノ御旗　太刀兼廣作　短刀左文字	錦旗　太刀　短刀
尚古集成館陳列	鎧	鎧

表2「陳列品繪葉書」内容一覧

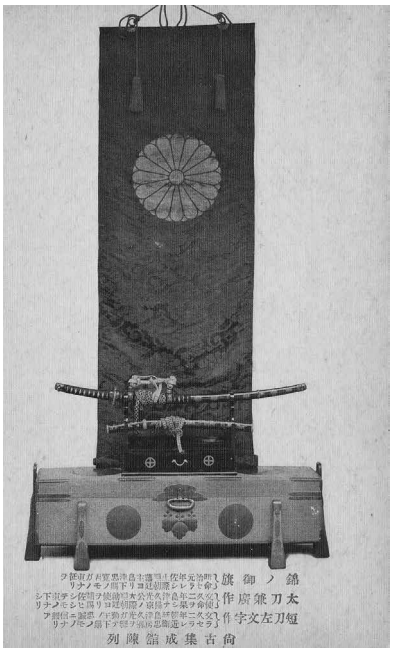

図５　「錦ノ御旗」

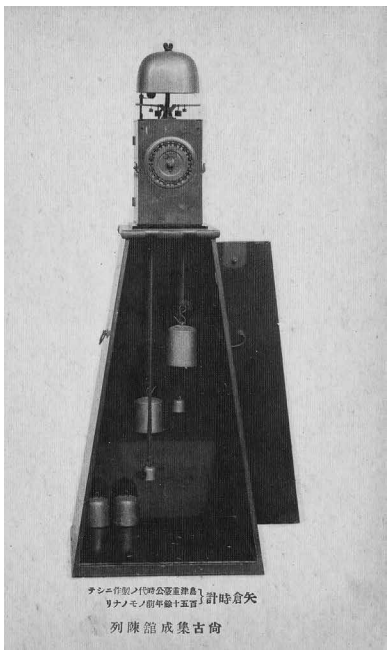

図６　「矢倉時計」

絵葉書には個別の説明が付けられていて、例えば「錦ノ御旗」（図５）には「明治元年佐土原藩

主島津忠寛君ガ東征ヲ命ゼラレシ際朝廷ヨリ下賜ノモノナリ」とあり、「矢倉時計」（図６）には「島津重豪公時代ノ製作ニシテ百五十餘年前ノモノナリ」と書かれている。ここから、「旧藩領と諸地域」を含めた視野と、「文武」両方の事蹟尊重が指摘できる。

この絵葉書と尚古集成館の『陳列品目録[33]』とを対照してみると、次のようになる（表３）。

絵葉書	展示品目	目録説明	所蔵家
島津義弘公乗馬模型	島津義弘公乗馬模型馬具共	公ガ朝鮮役從軍中ノ乘馬ノ模型ニシテ馬具ハ其ノ當時ノモノ	公爵島津家
駕籠 挟箱 茶辨當	駕籠	舊藩時代藩主カ幕府ヘ参勤ノ際乘用セラレシモノ	公爵島津家
	挟箱	舊藩時代藩主ノ道中行列ニ用ヒシモノ	公爵島津忠承
	茶辨當	舊藩時代藩主ノ道中行列ニ用ヒラレシモノ	同
矢倉時計	矢倉時計 大型	島津重豪公時代ノ製作ニシテ百五十餘年前ノモノナリ	公爵島津家
錦ノ御旗 太刀兼廣作 短刀左文字	錦ノ御旗	明治戊辰六月五日佐土原藩主島津淡路守忠寛君カ京都ヨリ東征ヲ命セラレシ際朝廷ヨリ賜ヒシモノ	伯爵島津忠麿
	太刀	文久二年島津久光公大原勅使ヲ補佐シテ東下シ使命ヲ果シテ歸京ノ際　孝明天皇ヨリ賜ヒシモノ	公爵島津忠承
	短刀	前ニ同シ	同
鎧	甲冑	薩藩甲冑製作所製島津珍彦男ガ元治元年禁闕ノ變ニ着用ノモノ	男爵島津壮之助

表３　絵葉書・『陳列品目録』対照表

刀の説明は若干字句が異なるものの、「錦ノ御旗」場合「明治戊辰六月五日佐土原藩主島津淡路守忠寛君カ京都ヨリ東征ヲ命セラレシ際朝廷ヨリ賜ヒシモノ[34]」とあって、ほぼ同じである。『佐土原藩史』忠寛時代の記述にも、６月５日江戸攻略に向かう忠寛に対し「勅して菊花御紋章入錦の御旗一旒、御剣一振、晒布一匹、扇子一握を賜ひ[35]」とある。佐土原藩は鹿児島藩の支藩で、維新の際にも本藩と行動を共にした。旧領は宮崎県下にあるが、県は異なっても線引きをせず、佐土原島津家の史（資）料を展示している。この視野は、同じ宮崎県下の都城島津家に対しても見ることができる。

中世には北郷氏を名乗っていた都城島津家は、鹿児島藩内の私領として幕末まで続き、慶應４（1868）年の鳥羽・伏見の戦いでは、鹿児島藩の一翼として旧幕府軍を撃破する功績を挙げた[36]。その後も一時期を除いて旧領都城にも邸宅を構え現在に至っている。家政日誌[37]には大正12年５月11日、

一　先般来島津公爵家所管麑城尚古館長ヨリ陳列参考品トシテ当家ノ秘蔵品三國筆宛〔苑〕並ニ紺糸縅懇望ニ付昨日北郷家従該甲冑携行シ本日帰来但シ三國筆苑ハ東京邸ヨリ直接該館ヘ送付セリ

とあって、麑城（鹿児島）の尚古館（尚古集成館）からの依頼で、都城邸より「紺糸縅鎧」と、東京邸（東京での住まい）より「三國筆苑」を送っていることが分かる。『陳列品目録』と対照すると、「甲冑　附属品共紺糸縅　北郷忠相カ大永ヨリ天文年間戦陣ニ着用セシモノ[38]」、「三國筆苑折本　薩藩名臣賢佐ノ遺墨ヲ集メタルモノ[39]」とそれぞれ記載されている。

『陳列品目録』掲載の展示品目数を挙げれば、「甲冑、刀剣、銃砲類」49品目、「文書日記類」122品目、「薩摩藩及薩藩関係刊書」52品目、「書、画、絵図面類」142品目、「画像、木像、写真」82品目、「薩摩陶器磁器」52品目、「薩摩硝子」40品目、「器械類」５品目、「雑品」149品目に上る。「甲冑、刀剣、銃砲」といった尚武の側面だけでなく、島津家25代島津重豪編輯『鳥名便覽』や『質問本草』など鹿児島藩における博物学と出版事業[40]、薩摩切子として知られる「薩摩硝子[41]」や「器械類[42]」といった28代島津斉彬の集成館事業も取り上げている。また西郷や大久保などの書簡や肖像も収集されている[43]。

さて、「設立趣意書」の意識がどれだけ貫徹したかであるが、集められた展示史（資）料から見える尚古集成館開館時の状況は、薩摩国・大隅国だけで鹿児島藩の歴史を構成するのではなく、広く史（資）料を集め、日向国にあった支藩の「佐土原藩」や私領「都城島津家領」も展示構成の中に加えられていたことが分かる。取捨選択の中で旧領の史（資）料が展示に不可欠と考えられていたことは、都城島津家の家政日誌に「三國筆苑」と「紺糸縅鎧」を「懇望ニ付」と記録されたことからも推察できる。

多くの品目の中から選ばれた展示品が、尚古集成館の絵葉書になったのであるが、ホワイトバックの写真に目録並みの詳しい解説が付けられた絵葉書は、来館者が持ち帰って所蔵すれば、展示図録の役割を果たし、郵送された場合には受取り手に展示品を紹介することになり、対外的な役割も兼ねている。この時代の絵葉書は、ミュージアムショップの隅に置かれているポストカードとは役割やレベルが異なるのであり、絵葉書になるということは、展示品としての位置付けは高い。現在佐土原島津家拝領の「錦ノ御旗」は、宮崎県総合博物館に収蔵されているが、「錦ノ御旗」が絵葉書に収まっている事実は、かつての一時期、尚古集成館展示品であった履歴と、また旧領諸地域の史（資）料を含めて、鹿児島藩の歴史を語るという展示意識を示している。

結びにかえて

絵葉書は場所日時不明、発行者不明、裏面白紙などが多く、いつ、どこで、だれが、何のためにといった史料批判がなかなか通用しない。それがために敬遠され、補助資料となっている。しかし中には、ある程度発行者、場所、時代などが特定できるものもある。これらについては、可能な限り備考を埋める作業をしてみてはどうだろうか。

本稿は、鹿児島関連の「名所」や「博物館」関係の絵葉書を素材にして、発行の背景や関連する事項を追ってきたが、桜島に加えて、西南戦争の戦跡が早くから地元では史蹟化したこと、尚古集

成館の当初の展示が、旧領諸地域を含めた展示意識を持っていたことなどを明らかにできたと思う。歴史史（資）料として利用するには、絵葉書を眺めるだけでは困難で、より多くの他史料との対照が不可欠である。うまく持てる情報が合致すれば、絵葉書は補助資料の地位を超える可能性をもっている。

註

（１）佐藤健二：『風景の生産・風景の解放』、講談社叢書メチエ、講談社、1994年、p25

（２）生田誠：『麗しき日本絵葉書　100の世界』、日本郵趣出版、2009年

（３）原口隆行編著：『絵葉書に見る交通風俗史　明治・大正・昭和初期の乗り物原風景　平原健二コレクション』、JTB、2002年。松田法子著古城俊秀監修：『絵はがきの別府』、左右社、2012年。

（４）富田昭次：『絵はがきで見る近代日本』、青弓社、2005年、橋爪紳也：『絵はがき100年　近代日本のビジュアル・メディア』、朝日選書、朝日新聞社、2006年。

（５）学習院大学史料館編：『絵葉書で読み解く大正時代』、彩流社、2012年

（６）註（１）佐藤前掲書p25

（７）島田健造著友岡正孝編：『カラー復刻版　日本記念絵葉書総図鑑』、日本郵趣出版、2009年、まえがき

（８）橋爪紳也：『絵はがきで読む大大阪』、創元社、2010年

（９）『鹿兒島新聞』大正元年12月12日付

（10）樋畑雪湖：『日本絵葉書史潮』、1936年、日本郵券倶楽部（復刻版、岩崎美術社、1983年）p100

（11）註（10）樋畑前掲書p103、104

（12）細馬宏通：『絵はがきの時代』、青土社、2006年、p250

（13）『鹿兒嶋名勝』、文華堂、〔大正期〕

（14）高柳毅：『かごしま印刷史』、鹿児島県印刷工業組合、2003年、p82

（15）鹿兒島郷土會出版：『新版　薩摩風俗　鹿兒島言葉』、文華堂、〔大正期〕

（16）鉄道院：『鉄道院線沿道遊覧地案内』、鉄道院、1910年、p135～136（山本亮介編：『コレクション・モダン都市文化　第61巻　旅行・鉄道・ホテル』、ゆまに書房、2010年、所収p143～144）。

（17）勝野時太郎：『鹿兒島市案内記』、〔勝野時太郎〕、1910年。巻頭に県知事の題字と、「克く鹿兒島市勢を實現せしむるに於て從來刊行の同書類に比し一日の長あるを認めすんはあらす」という市長の序文を掲載している。

（18）註（17）勝野前掲書p57～58

（19）註（17）勝野前掲書p65

（20）註（17）勝野前掲書p57

（21）註（14）高柳前掲書p81

（22）註（17）勝野前掲書広告p15、鹿児島市仲町吉田書房広告

（23）林茂・原奎一郎編：『原敬日記　第六巻　總索引・關係資料』、福村出版、1981年、p137、「筑紫紀行」

(24) 同編：『原敬日記　第四巻　總裁就任』、福村出版、1981年、p169、大正５年４月13日付

(25) 註（17）勝野前掲書p26

(26) フェルディナンド・フォン・リヒトホーフェン著上村直己訳：『リヒトホーフェン日本滞在記　ドイツ人地理学者の観た幕末明治』、九州大学出版会、2013年、p195～197。

(27) 註（17）勝野前掲書p57

(28) 註（23）原前掲日記p138～140、「筑紫紀行」。

(29) 田村省三：『尚古集成館　島津氏800年の収蔵』（かごしま文庫12）、春苑堂出版、1993年、p202～204、p220～223

(30)『尚古集成舘設立趣旨と集成舘の沿革』、〔尚古集成館、戦後〕ｐ１～２

(31) 島津忠重：『随筆　はばたき』、東京書院、1966年、p434

(32) 尚古集成館：『陳列品繪葉書』、〔尚古集成館〕、〔大正12年以降〕

(33)『大正十二年七月一日現在　陳列品目録』、磯島津家尚古集成館、1923年

(34) 註（33）前掲目録p60。佐土原島津家は藩祖以久所用の「金鷹羽馬印」も提供している。

(35) 桑原節次原著佐土原町教育委員会校訂：『佐土原藩史』、佐土原町教育委員会、1997年、p366

(36) 山下真一：『都城の世界・「島津」の世界　都城島津家・戦国領主から《私領》領主への道』、鉱脈社、2011年、p112～113。戊辰戦争については、都城市史編さん委員会編：『都城市史　通史編　近現代』、都城市、2006年、p３～９、籠谷真智子：『都城と戊辰戦争』、（島津久厚、1968年）がある。

(37) 川越明編：『大正における都城島津家日誌』、島津久厚、1986年、p383

(38) 註（33）前掲目録p1。都城市教育委員会編：『都城島津家伝来史料　史料調査報告書（３）』、（都城市教育委員会、2010年）では、「鉄錆地南蛮胴具足」として調査記録され（p276）、構成部分に製作年代の開きがあるものの「九州に残された当世具足の名品」と評価されている（植野かおり「美術工芸品解説」p259）。

(39) 註（33）前掲目録p25。都城市教育委員会編：『都城島津家伝来史料　史料調査報告書（１）』、（都城市教育委員会、2010年）p47～55目録参照。「三國筆苑」は、鎌倉時代後期から近世にいたるまでの189通の書状や和歌、漢詩などを貼り込んだものである（山下真一「史料の概要」p22）。

(40) 註（33）前掲目録p19。25代重豪は、大正６年発行の舊薩藩島津家御祖先並ニ殉難者祭典委員編：『舊薩藩歴代一覧』、（同委員、1917年）では「造士舘、演武舘、醫学院、明時舘を創建す又本草の書成形圖説成る其他南山俗語考の著あり」（p12）と文教を興隆させた藩主として認識されていた。田村省三：「薩摩藩における蘭学受容とその変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告　第116集』、国立歴史民俗博物館、2004年、p212～214参照。

(41) 註（33）前掲目録p47～50。

(42) 註（33）前掲目録p51。旧集成館で使用した1863年オランダ製の旋盤等が展示されている。

(43) 註（33）前掲目録p10～16、39。

武田信也（執筆時宮崎県立図書館、現在都城島津邸）